

## 教育スタッフ PLAZA

連載

研修の理解を深める

# テスト フォーミュレーション



第④回

### 解答の流儀②

～「答えづくり」からの学び～

市進ホールディングス  
コンサルティング事業研究所 所長

細谷幸裕



ほそや ゆきひろ

1996年、株式会社市進入社。現場を経て、2005年より同社教育本部教務統括室にて講師養成に携わる。2008年からは全国の教育委員会・私学での教員研修の講師を務めるようになり、現在は企業・官公庁を中心に、「社内講師養成」、「OJTトレーナーのコーチング」、「説明力強化」などの研修・コンサルティングを行っている。

前回は、解答のつくり方とその学習効果について触れました。今回は、答えづくりを実践するなかで解答者自らが経験した学びについてお伝えします。

#### 研究会での検証でわかったこと

2020年、テストフォーミュレーションをリリースするにあたって、その効果検証を目的とした研究会を、人材開発担当者の人たちと5カ月にわたり実施し、問い合わせから答えづくりまでさまざまな角度から検証しました。そのなかで、答えづくりにおいては、以下の3つの観点から解答を構成すると、学習効果の高いアウトプットが生成されることがわかりました。

##### ①設問の条件を満たす

皆さんも学生の頃、先生から「問題をよく読みなさい」と言われた経験があると思います。聞かれた問い合わせに対して、条件を満たす解答をすることはあたり前のように思えますが、これが意外とできていないのです。

この「設問を読み込む」ということは、インプットした学びを相手の要求や条件に合わせて再構築することにもなるため、「思考の深化にとても効果的だ」という意見が、研究会メンバーからあがりました。一方で、塾や予備校のテストでもよくあることなのですが、「設問で聞かれていないこと」を書いてしまい、論点がずれた解答になってしまうケースもありました。

テストフォーミュレーションにおいても、出された問い合わせに対して、定められた条件のもと、論点をすらさず解答を構築することは重要な前提となります。これができるはじめて、解答の評価ができるのです。

##### ②定量的・定性的に分析する

解答を作成する際、根拠を示すことで説得力が増すのはもちろんですが、特に、データや事例など、定量的・定性的に分析された情報を入れた解答は、他者の納得度だけでなく、解答作成者自身の理解度にも影響することがわかりました。

ここでいう定量的・定性的な分析とは、学習の際に使用したテキストや資料以外の先行研究などの知見を自ら検索して、引用することです。そうすることにより、解答作成者自身の深い学びにつながったという反応がありました。ただし、このような結果を得るために

には「問い合わせ探究的である」という前提が必要になるため、あらためて、問い合わせの「質」が重要であることもみえてきました。

### ③創造性を発揮する

何をもって「解答が創造的であるか」を測るかは難しいところですが、研究会では、答えのなかから「相対的に刺激を受けるものは何か」という観点で検証しました。結果、与えられた問い合わせから焦点となる対象の「観察」を通じて問題点が抽出されたものであり、かつ、参加者同士のブレインストーミングによって構成されたものであるほど、評価の高い解答になることがわかりました。

例えば、業務改善に関して、「なぜ研修で学んだ業務改善の手法は現場で実践されにくいのか」という問い合わせと向き合ったとしましょう。まず、研修受講者の反応を観察し、その観察からみえてくる対象者の言動や感情、行動をもとに問題点を特定します。その際、ポジティブな発想でアプローチしていくことで、「個々がまず業務改善を実践してから研修に臨む」や「『改善事例』を抽出することからはじめてみる」など、模範解答的ではありませんが、相対的に創造性の高い答えづくりができることがわかりました。お気づきの人もいると思いますが、これはデザイン思考のアプローチでもあります。テストフォーミュレーションはデザイン思考と親和性が高いのです。

このように、どのような側面から解答を構築するかによって、答えそのものがまったく変わってきます。テストフォーミュレーションの場合は、問い合わせをつくるときに明確な答えがあるわけではなく、探究心が起点となります。そのため、答えが学習者同士の刺激になります。参加者全体の学びとなっていくのです。

### 選択肢のある設問の答えづくり

ここまで述べてきた答えづくりのポイントは、明確な答えがない問い合わせに対する解答のつくり方や記述形式での視点となります。ここからは、明確な答えのある選択問題のつくり方についてみていきます。

選択問題というと、いくつかの選択肢から正しいもの、または誤ったものを一つ、もしくは複数選ぶ

図表 選択肢設計の例

#### 【設問】

次のなかから、〇〇について最も適切なものを一つ選びなさい。

#### 【選択肢】(5 抹の場合)

- A 正答
- B 誤答① 正答と正反対のもの
- C 誤答② 正答とは主旨がずれている（似ている）もの
- D 誤答③ 正答を極端に抽象化（曖昧に）したもの
- E 誤答④ 正答とは関係のない（言及されていない）もの

もの、語群を並べ替えさせたり、選択群から適語を選ばせるものなど、バリエーションが多数あります。ここでは、思考が深まる選択肢のつくり方のポイントをお伝えしましょう。

まず、5つの選択肢で「正解が一つ」の選択問題を作成するとしたとき、皆さんなら、正解以外の誤答をどのような観点で作成しますか？

塾予備校のテストづくりでは、正答を基準として、そこから「正反対の選択肢」「正答と趣旨がずれた選択肢」「正答を極端に抽象化した（曖昧にした）選択肢」「正答とはまったく関係のない選択肢」で配列していくのが基本になります。こうすることで、解答者は選択肢すべてを比較したうえで答えなくてはならなくなり、結果として、幅広い思考力が求められるようになります。選択問題は明確な答えが存在するぶん、正答をどのように選ばせるかが重要になるわけです（図表）。

逆に、つくり手からすれば、誤答を作成するアプローチは、正答を基準にして多様な視点を複数抽出する必要があるため、学びを深める訓練にもなります。

このように、答えづくりには、問い合わせにも匹敵する思考深化のヒントが多数あります。テストというと1個の答えを探しにいきがちですが、答えをつくる経験をすることで、さまざまな可能性を考えるきっかけにもなります。

\*

次回は、テスト全体の構成を考えるテストデザインの視点についてお伝えします。